

さまざまな経験やそのときどきの想いを
糧に築きあげて昨日より今日
今日より明日の人生を充実させている
美曾作友紀子さんの生き方を紹介します。

One's Life

(より豊かに生きるためのヒントをお伝えします)

旧くて新しい、 農業のかたちをめざして

南部ベース代表 美曾作友紀子さん



【Profile】八戸市出身。南部町で鉄1本から農業を始め、現在就農6年目。輸入資材に頼らない栽培方法に取り組む、保存食づくりの教室も主催している。

被災して気づいた日本の食糧問題 なんとかしたいと自ら農家へ

地元の商業高校を卒業後、海上自衛隊に入隊した友紀子さん。有事に備え訓練の日々を過ごしていましたが、より充実感・達成感が得られる仕事を求めて8年務めた自衛隊を退職します。退職後は全国に300店舗以上あったリサイクルのチェーン店で働き始め、店長やエリアマネージャーとして赤字店を黒字にするべく東北各地の店舗を飛び回りました。「自衛隊勤務からの反動で、若くて勢いのある会社でゼロからお店を立ち上げる仕事はやりがいがありましたね。社員は男性が多かったですが、みんなで会社を作る風土があり楽しかったです」。

しかし、福島県郡山にある店舗で新事業の立ち上げ準備をしていた2011年3月。東日本大震災が発生し、店舗は被災してしまいました。

「被災してからの福島はひどい状態でした。揺れも続いていたり、食糧を買いに行ってもない。放射線の線量も高い。自衛隊で危機管

理の訓練をしていても、震災はただただショックでした」。それまでがむしやうに仕事を頑張ってきた気持ちの糸がぶつ切り切れてしまい、仕事を辞めて八戸市にUターンします。

立ち直れない心そのまま知り合いに紹介された会社で働き始め、社長に薦められて起業家養成講座を受講しました。「会合で『日本の食糧問題ってやばいよね。食糧生産は国防だよ』という話になり、そのときに、国防をしていた自分、被災したときに物流が途切れ食糧がなかったこと、今の自分に何ができるんだろう、というのが全部重なり、『国防のための食糧生産はわたしにしかできない』と思ったんです」。早速友紀子さんは、翌年の春から農家となるために動き出しました。

初めてだらけのひとり農業は失敗の連続

知り合いから耕作放棄地を借り、南部町でひとり農業を始めた友紀子さん。もちろん農業は経験がないので栽培方法は手探りです。「日本では農産物の栽培に使う化学肥料や農業資材を海外から輸入しているのも、もし何かあっても海外からの物流が止まると農作物が作れないんです。でもそれだといざというときに困ってしまふ。だからなるべく輸入資材に頼らない農業を目指しています。もし何かあっても日本が焼け野原になったとしても、種さえあれば植物は育つはず。南部町で育つ植物の種を『ききん箱』に入れて保管し、毎年更新してるんです」。県内各地に友紀子さんと同じように作物の種の保存をする仲間を増やしたいという考えから、地域の拠点という意味を込めて自分の畑を「南部ベース」と名づけています。

「後ろを振り返り向く性格じゃないんですよね。前にしか進めないというか。だから人よりもたくさん失敗してきたけれど、失敗したからこそ分かることもある。この土地で育った作物の種

を繰り返し植えることで、年々育ちが良くなっています」。

その土地で育つ種を守り、食文化を守る。 それが南部ベースの目指す農業

友紀子さんは2015年から南部町で農業を始めて6年目。結婚したことで、今は夫の母がやっているりんご畑も手伝っています。現在は米、麦、大豆を中心に、大根やサツマイモなど季節に合わせた野菜の栽培とりんご栽培、それらの加工品の販売まで行っています。野菜は、保存食に出来るかどうか栽培基準。ここにも「いざというときの備え」という友紀子さんの意識があります。収穫した野菜は、八戸市にあるスーパーのチェーン店などへ卸しています。

「毎日やるのがたくさんあって畑に手が回らないこともあるけれど、今では近所のお母さんたちや義母が畑を見てくださいることもあり、一緒に農業をする仲間が増えました。でも、まだまだやりたいことがあるんですよ」と友紀子さん。これまで4年間続けてきた味噌作りの講座のほかに、漬物作りなどの伝統料理を伝える講座を始める予定とのこと。また、忙しい農家さんたちのための野菜がたっぷりのお弁当のデリバリーなども考えています。自分も一緒に学んでいきながら、味噌づくりも漬物づくりも楽しみたいそうです。

「今は1年中キュウリやトマトが売っていますよね。便利だけれど、旬の野菜は分かっていく。野菜は旬の時期が一番おいしいはずなんです。昔のように旬を味わうことや、食材を大切に保存すること、その土地で育つ種を繋いでいくことを大切にしたい」と話す友紀子さん。自身の拠点「南部ベース」で、旧きよきやり方を取り入れながら、友紀子さんは今日も農業と向き合っています。